

Title	張竹梅『瓊林雅韻研究』を紹介し併せて関連の研究を論評する
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 28 p.133-p.144
Issue Date	2003-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79906">https://hdl.handle.net/11094/79906</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 張竹梅『瓊林雅韻研究』を紹介し 併せて関連の研究を論評する

佐々木 猛

### An Introduction to Zhang Zhu Mei's "*Qiong Lin Ya Yun Yan Jiu*" and a Discussion of Related Research

SASAKI Takeshi

このたび南京滞在中に張竹梅著『瓊林雅韻研究』を見ることを得た。この書は『東洋学文献類目』にも著録されておらず、おそらくは日本に舶載されていないと思われるので、これを機会に本書の簡単な紹介をし、かつ他の研究についても評価を加えようと思う。張女史には他に「試論瓊林雅韻音系的性格」1988年があるが、本書はこれを増補したものであろう。

張竹梅『瓊林雅韻研究』寧夏人民出版社 1993年、10月。並装B6版。3.5元。印刷数は一十冊。

目録3p. 陳振寰の序文6p. 緒論4p. 本文180p. 後記1p.

本文はすべて七章から成る。

- 第一章『瓊林雅韻』の内容
- 第二章『瓊林雅韻』の声母
- 第三章『瓊林雅韻』の韻母
- 第四章『瓊林雅韻』の声調
- 第五章『瓊林雅韻』と『中州韻』『洪武正韻』の比較
- 第六章 試みに『瓊林雅韻』の韻書の性質を論ず
- 第七章『瓊林雅韻』同音字表

第二章 声母に関する討論（p. 26）において次のようにいう。

- 「1. 平声中の濁音声母の存在はたやすく見て取れる。
- 2. 『瓊林雅韻』の声母のもう一つの顕著な特徴は仄声の清音声母濁音声母が一つに合併しているということである。」

第七章の「同音字表」は第二章の検討の結果にもとづいて濁音声母を立てて編纂している。しかし次の(表1)に見るように、その濁音声母「b, v, d, g-」などを持つ音節は平声のみ存在して上声・去声には見られないのである。

『瓊林雅韻』の「一穹窿」韻は去声の部分の一葉を欠くので、ここには「同音字表」の「二邦昌」の部分を示す。ただし音系を明確に示すために小韻代表字のみを掲げて二字目以下の所収字は省略した。小韻に附した数字は該当小韻の配列順序である。張竹梅氏のもの表にはないものであるが、他の表と対照する便宜のためにつけた。ただ[niaŋ]の去声「釀84」小韻がその「同音字表」に欠けているのは恐らく何かのミスであろう。

今この「二邦昌」の[an]の韻を例に考えれば、平声の「daŋ<sup>10</sup>」小韻を構成する字は「唐塘棠糖堂鎗螳塘唐/塘」である。<sup>(1)</sup>いかにも中古音の枠組みにそくして考えれば、これらの字はすべて全濁音声母を持つものである。しかし近古漢語の音の枠組みにそって考えれば、これらの字は北方官話においては平声の陰陽分裂に伴って陽平声の次清音声母となっているのである(現代音に即していえば「有気音の第2声」)。

また平声の「taŋ」小韻の字は「當璫簫鎗禿」であり、これを中古音から見ればすべて全清音声母の字である。北方漢語の音の枠組みから見れば陰平声の全清音声母となる(現代音では「無気音の第1声」)。

一方対応する上声・去声には濁音声母が見られないと張氏はいう。相当する位置には音節が存在しないが、実は中古音において濁音声母をもっていた小韻は清音に変化して、もともと清音声母であった小韻と合流しているのである。これも北方官話のありさまと同じである。

この音韻表のような平声のみ濁音声母をもつ音系はいったいどのような漢語を想定すればよいのであろうか。

(表1)に即して収められている各字をみれば、「taŋ」の上声の字は「黨讜鄴党」であるが、いずれも中古音では清音声母の上声の音節である。また「taŋ」の去声の字は「蕩宕邊錫錫當揚擋錫」であるが、そのうち「當擋」は中古音では清音声母の去声の字であり、「宕邊錫錫」は中古音では濁音声母の去声の字である。一方「蕩」は中古音では濁音声母の上声の字である。この濁音声母の上声の字は北方官話においては清音声母の去声に変化するものであるから、この「蕩」字の位置はまさに北方官話のありさまに合致するものであるといえる。このようなありさまを張竹梅氏は「仄声では清濁声母が一つに合併している」といっている。このような現象はまさに近世北方官話の特徴であり、現代普通話にも見られる特徴なのである。

「1. 平声中の濁音声母の存在はたやすく見て取れる。2. 『瓊林雅韻』の声母のもう一つの顕著な特徴は仄声の清音声母濁音声母が一つに合併している」という上に引いた張竹梅氏の総括は、言葉をかえれば、「1. 中古音の濁音声母は平声においては独立して陽平声の次濁音声母となる。2. 仄声においては清音化して本来の清音声母と合流する」ということ

ができるのである。<sup>(2)</sup>

表1. 張竹梅氏による『瓊林雅韻』音韻表

韻 調 声	邦 昌 -aŋ			邦 昌 iaŋ			邦 昌 uaŋ		
	平声	上声	去声	平声	上声	去声	平声	上声	去声
p	【缺】	榜 66	謗 101						
p'	鏘 23		胖 77						
b	傍 24								
m	忙 11	莽 69							
f	方 29	倣 62	放 95						
v	房 30								
w	亡 13	罔 63	望 90						
t	當 10	黨 68	蕩 97						
t'	湯 33	倘 67	盪 96						
d	唐34/塘								
n	囊 17	囊 73		孃 14		(釀 84)			
l	郎 15	朗 70	浪 98	良 12	兩 52	亮 80			
ts	臧 48		藏 100	漿 5	漿 51	匠 87			
ts'	倉 43			搶 37	搶 54				
dz	藏 44			牆 38					
ʂ	喪 8	類 65	喪 76	湘 35	想 55	象 78			
z				詳 36					
tʃ	章 3	掌 56	仗 85				莊 6		壯 81
tʃ'	昌 31	敞 59	唱 88				牕 19		創89/愴
dʒ	長 32						床 20		
ʃ	商 4	賞 61	上 82				雙 2	爽 57	
ʒ									
ʒ	穰 47	壤 60	讓 83						
k	崗 7		杠 104	殭 1	講 49	絳 75	光 9	廣 72	誑 91
k'	【缺】	慷 74	亢 103	羌 25	強 53		匡 39		壙 105
g				強 26			狂 40		
ŋ	昂 18								
h				香 21	響 58	巷 86	荒 45	謊 71	況 92
h	航 16		行 99	降 22			黃 46		晃 94
ʔ			盎 102	鶯 27			汪 41		
j				陽 28	養 50	恙 79	王42/往	枉 64	旺 93

私はこのような観点から『瓊林雅韻』の音系は北方官話を表しているものと考え、それは具体的には下の(表2)の通りである。この表において(表1)と同じく小韻代表字と該当小韻の配列順序を示すが、平声は陰陽二声調に分かれる。いわゆる北方官話の音系は元代の周德清の『中原音韻』(以下「周本」と略称する)に初めて体系的に現れるが、そこでは平声は陰陽に分かれてすでに二つの声調に分裂していた。そして『瓊林雅韻』が卓從之の『中州楽府音韻類編』(以下「卓本」と略称する)にもとづいて編纂されたという観点から、これと比較対照してその結果を以下の記号によって記した。また周本が卓本と同系統の一本にもとづいて編纂されたという観点からこれとの異同も記した。

( ) 印はその小韻が卓本に存在しないことを示す。

[ ] 印はその小韻が卓本・周本いずれにも存在しないことを示す。

○ 印は該当する小韻が卓本にはないが周本には存在することを示す。

表2.『瓊林雅韻』音韻表

韻 調 声	邦 昌 aŋ				邦 昌 iaŋ				邦 昌 uaŋ			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
p	【缺】		榜 66	謗 101								
p'	鎗 23	傍 24		胖 77								
m		忙 11	蟒 69									
f	方 29	房 30	倣 62	放 95								
v		亡 13	罔 63	望 90								
t	當 10		黨 68	蕩 97								
t'	湯 33	唐 34	倘 67	盪 96								
n		囊 17	[囊] 73		孃 14		(釀) 84					
l		郎 15	朗 70	浪 98	良 12	兩 52	亮 80					
ts	(臧) 48		○	藏 100	漿 5		漿 51	匠 87				
ts'	倉 43	藏 44			槍 37	牆 38	搶 54	○				
s	喪 8		類 65	喪 76	湘 35	詳 36	想 55	象 78				
ʃ	章 3		掌 56	仗 85					莊 6			壯 81
tʃ'	昌 31	長 32	敞 59	唱 88					牕 19	床 20		創 89
ʃ	商 4		賞 61	上 82					雙 2		爽 57	
ʒ		穰 47	壤 60	讓 83								
k	崗 7			(扛) 104	殭 1		講 49	絳 75	光 9		(廣) 72	誑 91
k'	【缺】		[慷] 74	亢 103	羌 25	強 26	強 53		匡 39	狂 40		壙 105
h		航 16	○	行 99	香 21	降 22	響 58	巷 86	荒 45	黃 46	誑 71	(況) 92
ø		昂 18		(盎) 102	鴛 27	陽 28	養 50	恙 79	汪 41	王 42	枉 64	旺 93

(晃) 94

この表から見て取れることはここに表現された音系はこれがもとづいた卓本の音系とほとんど同じであるということである。ただ卓本は平声の部分を「韻」「陽」「陰陽」に三分類しているので、いま平声を正しく陰陽に二分した周本の音韻表を基礎に卓本の実態を表すことにする。なお小韻に附した数字は該当小韻の配列順序を表す。

=印は卓本において平声の「陰陽」の項に収められる小韻の対を示す。

○印は周本には存在するが卓本には見えない小韻である。

表3.『中州楽府音韻類編』音韻表

韻 調 声	江 陽 aŋ				江 陽 iaŋ				江 陽 uaŋ			
	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去	平・陰	平・陽	上	去
p	邦 2		榜 67	謗 97								
p'	鎗 26=	傍 27		胖 76								
m		忙 13	莽 70									
f	方 32=	房 33	倣 63	放 92								
v		忘 16	罔 64	望 89								
t	當 12		黨 69	蕩 98								
t'	湯 36=	唐 37	倘 68	盪 93								
n		囊 20				娘 17	仰 73	○				
l		郎 18	朗 71	浪 94		良 14	兩 53	亮 79				
ts	○		○	葬 96	漿 6		漿 52	匠 85				
ts'	倉 46=	藏 47		愴 88	槍 40=	牆 41	槍 55	○				
s	桑 9		類 66	喪 75	湘 38=	詳 39	想 56	象 77				
tʃ					章 4		掌 57	帳 83	莊 7			狀 80
tʃ'					昌 34=	長 35	敞 60	唱 86	牕 22=	牀 23		創 87
ʃ					商 5		賞 62	上 81	雙 3		爽 58	
ʒ						穰 15	壤 61	讓 82				
k	岡 8			○	姜 1		講 50	絳 74	光 11		○	誑 90
k'	康 10			亢 99	腔 28=	強 29	強 54		匡 42=	狂 43		壙 100
h		航 19	○	行 95	香 24=	降 25	響 59	巷 84	荒 48=	黃 49	誑 72	○
θ		昂 21		○	鴛 30=	陽 31	養 51	恙 78	汪 44=	王 45	枉 65	旺 91

(表2)(表3)ともに平声の次清音声母の音節は「陰陽」の順に隣り合って配列されていることが見て取れる。たとえば「p'aŋ」の「陰」調の「傍23」と「陽」調の「傍24」、ほかにも「faŋ」の「陰」調の「方29」と「陽」調の「房30」。これは『瓊林雅韻』が卓本にもとづいて編纂された何よりの証拠である。

いま卓本の「2江陽」の「平声」と『瓊林雅韻』の「2邦昌」の「平声」の小韻を配列

すれば以下のようなになる。

一見して分かるように『瓊林雅韻』の小韻の配列順は卓本のそれとほとんど同じで、特に平声の「陰」「陽」「陰陽」の三分も、また「陰陽」の項の「陰」調の小韻と「陽」調の小韻が一組ずつペアになって配列される様子も全く同じである。さらにここに挙げるように小韻代表字、つまり該当小韻の第一字も両者ほとんど同じである。朱権自身が序文にいうように『瓊林雅韻』は実に卓本にもとづいて編纂されたこと明白である。

「一穹窿」の去声の部分の一葉が欠けていて「二邦昌」の冒頭の小韻はわずかに「彊釭」二字からなり、卓本でも「姜江釭薑彊疆」の六字を収めるのであるから、「彊釭」の前に数字が存在していたことは明かである。「邦」の小韻もこの欠葉部分にあったものと考えられる。つまり『瓊林雅韻』はその韻目に使った字はできるだけ韻の冒頭に出すようにして、この「邦」も「二邦昌」の韻目を構成する字としてこの韻の冒頭にあつて、そのために欠葉の部分にあったのであろう。

卓本の「10 康」小韻が『瓊林雅韻』に存在しないのはなぜか分からない。

卓本の「15 穰」小韻が『瓊林雅韻』では韻末に移されているのはなぜか分からない。

『瓊林雅韻』の韻末の「48 臧」小韻は卓本にないが、周本には存在する。『瓊林雅韻』における韻末の増加小韻である。

更にその後の「A 往，急行兒」「B 玉

表 4. 小韻配列表

『中州樂府音韻類編』	『瓊林雅韻』
[陰]	1. (彊) ○
1. 姜	2. 雙
2. 邦	3. 章
3. 雙	4. 商
4. 章	5. 漿
5. 商	6. 莊
6. 漿	7. 崗
7. 莊	8. 喪
8. 岡	9. 光
9. 桑	10. 當
10. 康	11. 忙
11. 光	12. 良 ○
12. 當	13. 亡
[陽]	14. 嬢
13. 忙	15. 郎
14. 良	16. 航
15. 穰	17. 囊
16. 忘	18. 昂
17. 娘	19. 牕
18. 郎	20. 床
19. 航	21. 香
20. 囊	22. 降
21. 昂	23. 鏘
[陰陽]	24. 傍
22. 牕	25. 羌
23. 床	26. 強
24. 香	27. 鴛
25. 降	28. 陽
26. 鏘	29. 方
27. 傍	30. 房
28. 腔	31. 昌
29. 強	32. 長
30. 鴛	33. 湯
31. 陽	34. 唐
32. 方	35. 湘
33. 房	36. 詳
34. 昌	37. 槍
35. 長	38. 牆
36. 湯	39. 匡
37. 唐	40. 狂
38. 湘	41. 汪
39. 詳	42. 王
40. 槍	43. 倉
41. 牆	44. 藏
42. 匡	45. 荒
43. 狂	46. 黃
44. 汪	47. 穰
45. 王	(48. 臧)
46. 倉	A. 往 急行兒
47. 藏	B. 瑯 玉名，与唐字同
48. 荒	
49. 黃	

名、与唐字同」の二字は韻末の増加字であり、それぞれ「42 王」「34 唐」小韻に合併すべきものである。張竹梅氏は正しくこのように処理している。なお「A 狂，急行兒」は次に「与王字同」「与王字同音」などという字を加えるべきである。

張竹梅氏は第六章第一節において

「平声を陰陽に分けないのは江南語音の現実の反映である」という。

『瓊林雅韻』は表面上は平声の部分を陰陽に分けないが、すでに音節表において十分に示したように、実際は平声は陰陽に二分されているのである。ではなぜ表面的には陰陽に分けなかったのであろうか。一つは『瓊林雅韻』が卓本にもとづいて編纂されたが、卓本の平声の三分法、つまり「陰」「陽」「陰陽」に分けるうち「陰陽」に配属する小韻を改めて「陰」と「陽」に二分する必要があるが、朱権は周德清ほどの音韻学の素養を身につけていなかったで、それができなかった。二つには朱権編纂に係る『太和正音譜』に見られるように、彼の曲学においては平声を陰陽に分ける必要がなかったのであろう。この書は最初の北曲の曲譜であるが、大きく二部に分かれ中国戯曲の資料集と元の雜劇の曲譜とからなる。その曲譜はほとんどは元曲（散曲および雜劇）の作品を曲律の順に従って配列している。これは自らもいうように『中原音韻』の「正語作詞起例」にもとづいて編纂されている。この曲譜において収めるすべての曲について一字ずつその声調を注記しているが、それは「平」「上」「去」、およびもと入声字の「作上声」「作上声」「作去声」であり、平声を陰陽に分けないのである。あるいは『瓊林雅韻』の平声のありさまはこのような平声の扱い方に対応しているのであろうか。

かつて『瓊林雅韻』を論じた際に平声の陰陽に分けないことについて、勅撰の韻書『洪武正韻』の影響が大であったと考えたのであるが、今はそれ以外の可能性について述べた。

平声を陰陽に分けないこの『瓊林雅韻』の姿をそのまま信じて考察を加えたものに他に鈴木 1988 がある。『瓊林雅韻』平声韻では陰陽の区別をしていない。底本である卓本では、平声を陰・陽・陰陽に三区分していた。朱権が参照していた可能性が大きい周德清本では陰と陽に平声を二分する。『瓊林雅韻』は両書の前例のいずれにも従わずに平声韻が構成されている。当然の結果として、以下の例のように『中原音韻』では陰陽の対立を成していた小韻が平声内に並存することになる。……『瓊林雅韻』編纂上の欠陥部分であると考えざるを得ない。」といい、次のような表を示す。小韻配列順を示す数字はいま付け加えた。

上引の文のすぐ前ではこの平声のありさまを称して「平声韻における同音衝突現象」といい、これを『瓊林雅韻』の一特徴であるかのように扱いながら、一方ではこれを「編纂上の欠陥」であると述べていて、論理の上で自己矛盾を来しているようである。（表5）の「邦昌一」の去声の「儉」小韻は『瓊林雅韻』には存在しないし、一方「邦昌二」の平声の「羌 25」小韻が落ちている。また「邦昌三」の平声の「莊 6」小韻は配列の位置が間違っ



表5. 鈴木勝則氏による『瓊林雅韻』音韻表

韻 声調	② 邦昌 一 aŋ			二 iaŋ			三 uaŋ		
	平	上	去	平	上	去	平	上	去
p		榜 66	謗 101						
p'	鏘 23 傍 24								
m	忙 11	蟒 69							
f	方 29 房 30	倣 62	放 95						
v	亡 13	罔 63	望 90						
t	當 10	黨 68	蕩 97						
t'	湯 33 唐 34	倘 67	盪 96						
n	囊 17	曩 73		孃 14		釀 84			
l	郎 15	朗 70	浪 98	良 12	兩 52	亮 80			
ts	臧 48		藏 100	漿 5	漿 51	匠 87	莊 6		
ts'	倉 43 藏 44			槍 37 牆 38	搶 54				
s	喪 8	頽 65	喪 76	湘 35 詳 36	想 55	象 78			
tʃ			愴	章 3	掌 56	仗 85			壯 81
tʃ'				昌 31 長 32	敞 59	唱 88	牀 19 床 20		創 89
ʃ				商 4	賞 61	上 82	雙 2	爽 57	
r	穰 47				壤 60	讓 83			
k	崗 7		杠 104	姜 1	講 49	絳 75	光 9	廣 72	誑 91
k'		慷 74	亢 103	強 26	強 53		匡 39 狂 40		壙 105
x	航 16		行 99	香 21 降 22	響 58	巷 86	荒 45 黃 46	誑 46	況 92
ŋ	昂 18								
θ			盎 102	鴛 27 陽 28	養 50	恙 79	汪 41 王 42	枉 42	旺 93

ているし、「姜1」小韻の代表字の「姜」字は『瓊林雅韻』に収められていない。

この整理の仕方も『瓊林雅韻』の体例にあまりに素朴に従ったために起こった誤解なのであろう。今日平声を陰陽に二分しない漢語方言はわずかに山西の太原一带に見られるのみであり、それもかつては陰陽に分かれていた二声調が近年に再び合流に向かったものであるようだ。<sup>(3)</sup> 張竹梅氏がいう「江南語音」も平声の陰陽は分かれていてそれぞれが更に清音声母・濁音声母を持つのである。それはちょうど王文璧の『中州音韻』の表す音系なのである。

( ) 印は卓本にない小韻である。

表 6. 『中州音韻』音韻表

韻 調 聲	江陽 aŋ						江陽 iaŋ					
	平声		上声		去声		平声		上声		去声	
p	邦 <sup>4</sup>	逋忙	榜 <sup>20</sup>	逋莽	謗 <sup>30</sup>	逋曠						
p'	胖 <sup>24</sup>	鋪忙			胖 <sup>15</sup>	鋪謗						
b	龐 <sup>25</sup>	蒲忙										
m	忙 <sup>14</sup>	麻邦	莽 <sup>26</sup>	蒙榜	(盲) <sup>35</sup>	忙浪						
f	芳 <sup>35</sup>	敷邦	紡 <sup>14</sup>	方榜	放 <sup>20</sup>	夫謗						
v	房 <sup>32</sup>	扶邦										
w	忘 <sup>13</sup>	無邦	罔 <sup>15</sup>	無榜	望 <sup>21</sup>	無放						
t	當 <sup>12</sup>	多郎	黨 <sup>25</sup>	多曩	當 <sup>31</sup>	都浪						
t'	湯 <sup>46</sup>	他郎	儻 <sup>24</sup>	他曩	盪 <sup>36</sup>	他浪						
d	唐 <sup>43</sup>	徒郎			(盪) <sup>32</sup>	徒浪						
n	囊 <sup>20</sup>	奴當	(曩) <sup>21</sup>	奴黨	(儻) <sup>37</sup>	奴浪	娘 <sup>17</sup>	尼姜	仰		(釀) <sup>14</sup>	泥降
l	郎 <sup>18</sup>	盧當	朗 <sup>27</sup>	羅黨	浪 <sup>27</sup>	狼蕩	良 <sup>15</sup>	离張	兩 <sup>5</sup>	良蔣	亮 <sup>8</sup>	離丈
ts	(臧) <sup>48</sup>	茲桑	(駟) <sup>30</sup>	茲礫	葬 <sup>29</sup>	茲喪	蜚 <sup>8</sup>	賁相	蔣 <sup>4</sup>	茲想	將 <sup>16</sup>	齎相
ts'	倉 <sup>44</sup>	粗藏			愴 <sup>19</sup>	妻喪	鏘 <sup>37</sup>	妻相	搶 <sup>17</sup>	妻想	(蹕) <sup>11</sup>	妻相
dz	藏				(藏) <sup>33</sup>	慈喪	牆 <sup>30</sup>	齊將			(匠) <sup>17</sup>	齊相
s	桑 <sup>9</sup>	思臧	顙 <sup>18</sup>	思朗	喪 <sup>4</sup>	思葬	相 <sup>36</sup>	西將	想 <sup>7</sup>	思蔣	相 <sup>2</sup>	西醬
z							詳 <sup>29</sup>	徐將				
tʃ	章	知傷	掌	之賞	帳	知上						
tʃ'	昌 <sup>33</sup>	痴傷	敞 <sup>11</sup>	痴賞	悵 <sup>6</sup>	痴尚						
dʒ	長 <sup>34</sup>	池傷			(仗) <sup>4</sup>	池上						
ʃ	商 <sup>7</sup>	尸張	上 <sup>13</sup>	聲掌	上 <sup>13</sup>	升帳						
ʒ												
r	穰 <sup>16</sup>	仁張	壤 <sup>12</sup>	人掌	讓 <sup>12</sup>	人帳						
k	岡 <sup>2</sup>	歌杭			(攔) <sup>38</sup>	孤桁	江 <sup>1</sup>	居羊	講 <sup>1</sup>	居養	絳 <sup>1</sup>	雞漾
k'	康 <sup>10</sup>	軻杭			抗 <sup>34</sup>	軻桁	腔 <sup>26</sup>	丘羊	強 <sup>6</sup>	欺養		
g							彊 <sup>41</sup>	渠良				
h							香 <sup>31</sup>	希江	響 <sup>10</sup>	希講		
ɦ	航 <sup>19</sup>	何岡	(沆) <sup>23</sup>	何黨	桁 <sup>28</sup>	霞浪	降 <sup>23</sup>	奚江			巷 <sup>5</sup>	奚降
ʔ			(盩) <sup>22</sup>	衣朗	(盩) <sup>40</sup>	烏浪	央 <sup>40</sup>	衣江	(軼) <sup>2</sup>	於港	怏 <sup>7</sup>	衣降
j	昂 <sup>21</sup>	吳岡					陽 <sup>28</sup>	移江	養 <sup>3</sup>	怡講		

(表 6) つづき

韻 調 声	江陽 uan					
	平声		上声		去声	
p						
p'						
b						
m						
f						
v						
w						
t						
t'						
d						
n						
l						
ts						
ts'						
dz						
s						
z						
tʃ	妝 <sup>3</sup>	之霜			壯 <sup>9</sup>	莊㊤
tʃ'	窗 <sup>22</sup>	初莊			戕 <sup>18</sup>	臙㊤
dʒ	幢 <sup>27</sup>	鋤霜			(狀) <sup>10</sup>	牀㊤
ʃ	雙 <sup>5</sup>	師莊	爽 <sup>7</sup>	霜㊤		
ʒ						
r						
k	光 <sup>11</sup>	姑黃	(廣) <sup>19</sup>	孤往	誑 <sup>24</sup>	姑晃
k'	匡 <sup>38</sup>	枯黃	(擴) <sup>29</sup>	枯廣	曠 <sup>26</sup>	枯旺
g	狂 <sup>42</sup>	渠王				
h	荒 <sup>49</sup>	花光	誑 <sup>28</sup>	呼廣	(況) <sup>23</sup>	呼誑
h'	黃 <sup>45</sup>	胡光			(晃) <sup>22</sup>	胡誑
ʔ	汪 <sup>47</sup>	烏光				
j	王 <sup>39</sup>	吳光	枉 <sup>16</sup>	吳廣	旺 <sup>25</sup>	吳誑

この表に見るように『中州音韻』は従来の曲韻の書と異なり、反切の注記を有する。この反切を見れば平声の小韻の反切には陰陽の区別が見られないことが分かる。つまり「陰」の小韻の反切の反切下字と「陽」の小韻の反切下字との間に何ら差異を見いだすことはできない。たとえば「邦4」の反切は「通忙切」,「忙14」の反切は「麻邦切」である。つまり『中州音韻』においては平声の陰陽は区別されることなく、ここにいる平声は一種類であり、声母の清濁の対立が存在することが分かる。このことは去声のありさまについてもいうことができる。つまり卓本や周本にくらべて去声に増加小韻が多く見られるが、これはいわゆる全濁声母の小韻なのである。去声においても平声と同じく声母の清濁の対立が存在するのであり、このような音系は（表1）や（表5）などが表す音系にくらべて整合的であるということが出来る。注目すべきは濁音声母の小韻は上声に存在しないということで、これは現在の呉方言の一般的な音系を示唆している。一方、呉方言でありながら入声韻を持たないことは一見すれば奇妙なことなのだが、『中州音韻』が卓本や周本、あるいはその系統の本にもとづいて編纂されたのであるから、それは当然のことであった。このことについては佐々木 1977 を参照されたい。

張竹梅氏は「『瓊林雅韻』『詞林要韻』『中州音韻』は同じ系統の性格が完全に同じ曲韻の韻書である。」というが、これが正鵠を得ていないことはすでに明白であろう。陳鐸の『詞林要韻』も『瓊林雅韻』にもとづいて編纂された最後の北曲系の韻書であった。このことは佐々木 1994 において詳細に論じたのでその音韻表を改めてここに示すことは控えようと思う。このこの書も『瓊林雅韻』と同じく、平声は陰陽に二分しないけれども実際は分かれているのである。

張竹梅氏は「後記」で次のようにいう。

「研究の結果『瓊林雅韻』は実は南曲のための韻書であるということが分かった。」

これは明朝に行われていた曲は南曲であろうという先入観にとらわれての見解であろう。明代の宮廷あるいは王府においては実は北曲が行われていたのである。岩城 1954 にいう。「これら二王（佐々木注、寧獻王朱権と周憲王朱有燾）が劇作の方面で活躍していたのは、大体宣徳（佐々木注、1426 - 1435）の頃であって、あたかも南戲の衰退の時期にあたっているのである。」「宮廷では生徳（1506 - 1521）の頃、なお専ら北曲が用いられていたことが、胡侍（生徳一四年・1517・進士）の「真珠船」巻三「北曲」の項に見える。」また岩城 1964 にいう。「二王が専ら北方系の雜劇のみを書いたのは、その頃、宮廷では北曲を用いるのが普通であり、王府もこれに倣っていたものであろう。」

朱権の『瓊林雅韻』は北曲のための韻書であった。また同じ朱権によって編纂された『太和正音譜』も雜劇の曲譜である。

・注釈

- (1) 「塘」は韻末の増加字であるとして、その「与唐字同」の注記に従って合併させている。
- (2) ただ「場錫」は中古音では次清音声母の去声字であり、「t'aŋ」の去声となるものである。なぜこの小韻に収められているのか分らない。あるいは偏旁読みであろうか。
- (3) 侯精一 1993。また福建の建瓯方言の平声は陰平声一種類のみであり、陽平声は上声や陽去声に合流している。

・文献表

岩城秀夫

1954「明の宮廷と演劇」『中国文学報』1

岩城秀夫

1964「明代戯曲の特質」『日本中国学会報』16

北京大学中国語文学系、語言学教研室

1989『漢語方音字匯』第二版

侯精一

1993『山西方言調査研究報告』山西高校聯合出版社

佐々木猛

1977「王文壁『中州音韻』の性格」京都大学中国文学研究室『均社論叢』5

佐々木猛

1991「朱権の『瓊林雅韻』(上)」『大阪外国語大学論集』6

佐々木猛

1992「朱権の『瓊林雅韻』(下)」『大阪外国語大学論集』7

佐々木猛

1994「最後の北曲系韻書『詞林韻釋』あるいは『詞林要韻』」『京都大学人文科学研究所研究報告・中国語史の資料と方法』

鈴木勝則

1988「『瓊林雅韻』について(上)」『中国語学』235

趙蔭棠

1932「中原音韻研究」『国学季刊』3-3。

張竹梅

1988「試論瓊林雅韻音系的性格」『陝西師大学報』1

陳章太・李如龍

1991『閩語研究』語文出版社

羅常培

1935「京劇中の幾個音韻問題」『東方雜誌』32-1

(2002. 10. 11 受理)